

2026年度

東大・国立選抜【iP class(東大専科)】試験
(2月11日)

国語

時間50分・100点満点

受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも回収される。

郁文館高等学校

□ 次の文章Xを読んで後の問いに答えよ。

文章X

ファッションと性意識の関係について考えるときにいつも思いだすのですが、大和和紀さんの『あい色神話』というコミックのなかに、①若い女性のこんなつぶやきが出てくるシーンがあります。

家まで歩いて十五分……走って十分……

なんだかてれてれ歩くのかったるい……

子どものころはよく走ってたっけ

おつかいいくのや学校への道……

いつからだろう

あまり走ることをしなくなったのは……

女の子特有の小走りしかなかったのは……

……走って……みようか……

あのころのように軽く足はあがるだろうか

耳のそばで鳴る風の音をきけるだろうか

身体を空気のように感じるができるだろうか

スカートは女性の〈性の制服〉だということ、そしてそれが身ごなしやふるまいの一つ一つをかたどり、やがて身体そのものにもなじんでしまって、だれが見てもじぶんが「女らしく」なっ
てしまっているということ、そして逆にそのことによって失ってしまったものへの静かな悲しみ
やほげしい疼き……。それらがたいへんにうまく表現されていると思います。

こうした〈性の制服〉と女性のセクシュアリティの意識のずれはだんだん無視できないほど大
きくなってきたようで、とくに友人の結婚披露宴などでいわゆる「令嬢」のような服装をしかた
なくするときには、多くの女性たちがまるでじぶんが「女装」しているような気分になっている
のではないだろうか。その意味で、衣服の構造にはその時代、その社会の男性的／女性的なも
のについての観念が強くはたらいっていると云えます。

同じことは、性以外の場面でも云えます。子どもらしさだとか高校生らしさ、母親らしさとか
教師らしさといった「らしさ」が話題にされるところではいつも、衣服やメイクやしぐさが、そ
ういうイメージとの深い a キョウハン 関係のなかで強力にはたらいています。ある種の社会的な
強制力をもって、です。このように身体の表面で、②ある性的ならびに社会的な属性を目に見え
るかたちで演出することで、服装は個人の人格を具体的にかたちづくっていくわけです。イメー
ジの服を着込みながら、着換えながら、です。こうしたことから、西洋には「Clothes make people」
(衣が人を作る)という諺もあるくらいです。

ひとの成長とは、このように、身ごなし(話し方、食べ方、歩き方、座り方、挨拶の仕方など)
と身づくろいの共通のスタイルのなかにじぶんを挿入していくことを意味します。そうしてひと
は社会の一住民となっていくわけです。職業上の制服や伝統的な民族衣装などは、そういう衣服
の社会的意味がとくにはつきり出ているものです。現代社会では、皇族も議員も会社員も芸術家
も宗教家も教師も、ほとんどの男性は公的な場面では、背広にネクタイというのがまるで制服の

ようになっていきます。逆の私的なシーン、あるいは③社会秩序への抵抗のシーンにも、やはり制服は歴然とあつて、茶髪、細眉、ミニスカート、ルーズソックスという出で立ちが、家と学校のあいだでの女子高生の「超」画一的な制服になっていて、そこからはみ出ることがとても勇気のあることになっているのは、ご存じのとおりです。このように見てくると、制服でない衣服を採すほうがむしろかしくなります。

このような横並びのファッションは、今日では、流行を追う主体性のないファッション服として、ネガティブに語られるのがつねですが、服装の歴史をふり返った場合、たとえば④背広という制服にしても、もとをたどれば、「自由」の象徴としてきわめてポジティブな意味づけをされています。

一七八九年の大革命に先だつ十年ほど前に、フランスでは服装の平等化がはじまったと言われています。旧制度の階級社会では、貴族階級の衣服は権威と威信のしるしとしてあり、そこには、色や素材、仕立てから裏地や手袋、衿、飾り紐といった細部にいたるまで、厳密な決まりがありました。b シンコウ(注1)ブルジョワジーは支配階級のそういう華美な服飾に対抗してむしろドレスダウンをc シコウし、単色・無彩色の地味な服を「市民の制服」として身につけだしました。やがてフロックコートをへて今日の背広の原型となる服です。

「自由」のしるしとしてのこうした市民の制服は、すべての市民が、出身階級やそれにまつわるさまざまの差別をd ハイキし、社会生活においてみなが同じスタートラインに立つという、そういう近代社会の理念のヴィジュアルな表明として編みだされました。同じ服を着ることは、あらかじめ決定された社会的条件から個人の存在をいったん解除するという意味をもつわけで、こうした差異の解消がそこではとてもポジティブな意味をもっていました。服飾とそれによって生まれる社会的な意味記号としてのはたらきを、服装からできるかぎり解除したシンプルな自由服として、背広の原型となるこうした服が作られたということは、いまではほとんど忘れ去られています。

いうまでもなく事態はやがて逆転し、現代では、こうした⑤差異の解消は個人にとって逆にマイナスの効果をもつようになっていきます。制服が画一性・没個性といったマイナス価値のしるしとされるのです。階級や職業、民族や出身地などの差異をかき消して、個人がじぶんを個として意識できるよう促した「自由」の服としての服装の一樣化が、こんどはそうした個人の特異性・独自性を曖昧にし、e ハイバン化するものとみなされるようになるわけです。諸個人の存在を画一化(ユニフォーム化)するものとして、です。

制服の意味は、現代ではこのようにすっかりネガティブなものに反転しました。なぜなら、個人が与えられた社会的条件(家柄とか出身階層)によって規定されることが少なくなると、個人は他の個人との差異によってじぶんの存在を確定せざるをえなくなるからです。同等の存在という意味で社会の均質化が展開するようになると、個人は他者との差異とか「個性」といったものを強調しないでは、じぶんの存在をじぶんで確認できなくなります。

ここで微妙な問題が発生します。差異の解消は個人を解放しますが、しかし差異の完全な抹消はこんどは⑥個人を不可能にするということです。他人と外見がほとんど同じであることは、市民のひとりとしての個人の存在を構成しますが、しかし外見がまったく同じになれば逆に個人としての存在は不可能になります。他者とほぼ同じであるということが個人の同一性を可能にし、逆に他者とまったく同じであるということが「だれ」という意味での個人に固有の同一性を不可

能にするわけです。このように、ファッションという現象には、ひとびとがたがいに相手の〈鏡〉となつて、みずからのセルフ・イメージを微調整しあうという面があります。「微妙な差異」にひとがこだわるゆえんです。

(「ひととはなぜ服を着るのか」 鷺田 清一)

(注1) 市民革命の推進者として活躍した市民階級のこと

問一 線部 a～e までのカタカナを漢字に直せ。

問二 線部①「若い女性のこんなつぶやき」とあるが、この「つぶやき」はどんなことを例えているのか、最もふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 人の性別とは、社会的、文化的な固定観念によって形成され、幼いころからのファッションがその人の人格や意識を確固たるものとして形成するということ。

イ あるファッションをまとうことによつて、その人の人格や意識が形成されていくが、現代では一つの性に固執することなく、自由に生きていくべきであるということ。

ウ ファッションが、社会的な強制力をもつてその人の性意識や人格を形成してしまうが、昨今ではこうしたファッションと性意識の間に亀裂が生じているということ。

エ ファッションは、それをまとう個人の自由な選択によつて表出されるが、子供の頃は自由に選択することができないということ。

オ 現代では自分の生まれながらの性について悩む人が増加し、本当の自分の性の在り方を求めるあまり、自分のファッションの在り方にも疑問を持つようになったということ。

問三 線部②「ある性的ならびに社会的な属性を目に見えるかたちで演出する」とはどういうことか。四十字以内で答えよ。

問四 線部③「社会秩序への抵抗のシーンにも、やはり制服は歴然とあって」とあるが、この一文について五人の生徒が「ルーズソックス」を例に話している。この部分について最も適切に理解している生徒は誰かを答えなさい。なお「ルーズソックス」とは、ボリュームと長さのあるソックスをたるませて履くソックスのことで、一九九〇年代から日本の女子高生の間で流行した。文字通り「ルーズ」なファッションとして、それを嫌う大人たちが少なからず存在していた。



ルーズソックスを履く女子高生

アさん 女子高生が、ルーズソックスを履いて、社会秩序に抵抗するとしても、大人たちの支配や権威は絶対に揺らがないということだよね。

イさん 女子高生が、ルーズソックスを履くことで社会や学校へ反抗する場合も、それ自体が画一的なファッションとなっちゃうってことだよ。

ウさん 女子高生が、だらしないルーズソックスを履くと大人たちから嫌われて、結局、学校からちゃんと制服を着ると言われるということですよ。

エさん 女子高生の誰もが、当時流行したルーズソックスを履くと、やがてそれも社会に認められて、大人のいいなりになっていったということかな。

オさん 多くの女子高生がルーズソックスを履くことは、ただの表面的なファッションでしかなかったのに、いつのまにか社会への反抗とみなされたんだ。

問五 線部④「背広という制服にしても、もとをたどれば、「自由」の象徴としてきわめてポジティブな意味づけをされていました」とあるが、なぜ「背広」が「自由」の象徴となったのか。八十字以内で説明せよ。ただし「近代社会」という言葉を必ず使うこと。

問六 線部⑤の「差異の解消」とは、どういうことか。本文から三十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えよ。ただし最後は「……こと」とつながるように書くこと。

問七 線部⑥「個人を不可能にする」とはどういうことか。最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えよ。

ア 他者と同じ外見を装うことで、他者との連帯と共生が可能となるということ。

イ 唯一無二の個人としての生き方が困難で、社会に迎合して生きていくということ。

ウ 生来の社会的条件から解放されると、人は個性を強調するようになるということ。

エ 他人との違いがなくなり、個人の固有性がなくなってしまうということ。

オ 社会が個人を支配し、個人の自由や人権などを奪ってしまうということ。

問八 左の参考文Yは、文章Xの 線部「とくに友人の結婚披露宴などでいわゆる『令嬢』のような服装をしかたなくするときには、多くの女性たちがまるでじぶんが『女装』しているような気分になっているのではないのでしょうか」という表現を解説した文章である。この文章を読み後の問いに答えよ。

参考文Y

新婦の「純白のウェディングドレス」や、その友人たちの『令嬢』のような服装」、そして、「コミック」の中の「若い女性」が「走ることをしなくなった」ことも、今までの伝統的な社会における女性としての役割が（A）化された結果生み出された服装やしぐさである。冠婚葬祭における礼服や、日常生活における女子のスカートの着用は、ジェンダーバイアスとして機能してきたし、今も機能している。しかし、現代では、このような性別に関する偏見を打破すべく、ジェンダーフリーなウェディングドレスが誕生したり、『令嬢』のような服装」を嫌う人たちが増加したりしている。こうした社会の変化を受けて、作者は、結婚式に参列する女性の友人たちのことを、『令嬢』のような服装」によって「女性」が「女装」している「気分」になると表現したのである。ユーモアがあって、（B）とした社会を風刺した表現となっており、個人の自由な生き方を選択している若者への共感が感じられる。

(1) 参考文Yの() 空欄Aに入る最もふさわしいものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 身体
- イ 観念
- ウ 幼児
- エ 差別
- オ 戯画

(2) 参考文Yの() 空欄Bに入る最もふさわしい四字熟語を次のア～オから選び、記号で答えよ。

- ア 支離滅裂
- イ 傍若無人
- ウ 疑心暗鬼
- エ 旧態依然
- オ 本末転倒

□ 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

満員に近い電車で、つり革につかまっていた。前に座っていた二人の年輩の女性がおしゃべりをはじめた。華やかな色合いの服を着た人と、眼鏡をかけ地味な装いをした人。家族ではなさそう。友だちだろうか。華やかなほうの人の声が、混んだ車内にしては大きい。すぐ終わるだろうと思っていると、さらに、さらにとつづく。

地味なほうの人は、小さめの声で(A)を打つ。相手の声が大きいので、周囲に遠慮しているようだった。華やかな人は片づけの話をしていった。(だれが主語か、わからなかったけれど)蒲団を買ってしまった人がいて、要らないのに無駄。それから、どこを探しても出てこないもの、話になった。電車の規則正しい音にまぎれて、出てこないものは、a ホウシヨク品だと伝わってきた。「箱だけ残っているのよ、からっぽでさ」。「売っちゃったんじゃないの」と、地味な人。投げやりだ。早くこのおしゃべりが終わらないかな、と思っているのだ。

「そんなことはありません」。①華やかな人が突然、です・ます体の丁寧語に切り替える。かちんと来たようだった。「あの人はそういう人じゃないです」と重ねる。四角い声。だれかが弁護されている。家族、親戚、その他、だれのことなのだろう。地味な人は、相手のいらだちを感じ取り、なだめるように返事をする。です・ます体に押されて、すっかり力がなくなったようすです。ふにやふにやとなる。

まもなく、華やかな人は会話にb アきたのか、黙りがちになった。電車は橋を渡る。河原のすきか枯れて、乾いている。華やかな人も地味な人も、その橋を渡る。あつというまに川を越える。方向のちがうものがつかのま交わり、離れていく。

この人が探しているホウシヨク品はなんの面白味もないところに落ちているのかもしれない。

日常の、隙間に。目を閉じておとなしくなった華やかな人の顔を、お面を見るように見た。艶のない肌。ぐいっと引かれた眉。なじまないことを承知で塗られているような、唇の赤色。ひらひらと飛び立ちそうなその色。あの人はそういう人じゃないです。先ほどの断言がよみがえる。弁護された人が男か女かも、わからない。

一冊の本を読んでいるような気持ちになってきた。目の前の女性たちの会話のなかに、確かに存在する人。会話のなかでその存在を知らされ、それだけであり、それ以上ではなく、今日の耳をかすめて通り過ぎる人。どのだれか、いくつで、なにをしていて、どんな背格好の人なのか、知ることはできない。機会ははない。二人に質問することも、もちろんできないし、そんなことをしたら、とたんに溶けて消えてしまうような感触だ。(B) においては、冬において。電車という箱は、そこには乗っていない人のおいまでも乗せて、言葉によって乗せて、銀色のレールをなぞる。なぞられて磨り減る。青空が後退する。

その図書館へ行くと『西脇順三郎全集』(筑摩書房)は、書架の一番上の段に並んでいた。床から天井までの書架なので、いくら背伸びしたところで届きはしない。係の人に頼む。はしごを持つてきてくれる。見かけよりも軽い、書架用のはしごだ。

「どの巻ですか」。「ぜんぶ見たいです、すいません」。係の人はいやそうな顔ひとつしなない。「少しずつ下ろしますから受け取ってください」。これまでも、その図書館では幾度か、全集を高いところから下ろしてもらったけれど、「ぜんぶ」と頼んでも、いやな顔をされたことはなかった。どの人も親切で、そのたびに、ほっとするような、予想を裏切られたような気がするのだった。「え、ぜんぶですか。必要な巻はわからないんですか」と咎められるのではないかと思いつながら、頼むのだ。②天気予報では雨、実際は晴れ、というのと同じで、晴れに越したことはないのだが、予感とはずれたことが、ぼんやりした寂しさと灰色の頼りなさを呼ぶのだった。係の人は、全巻を棚から下ろすと、はしごを抱えて、ここにこしながら立ち去った。

一九三三年(昭和八年)に刊行された詩集『Ambaralia』と、その後改稿を経て一九四七年(昭和二年)に新たなすがたで再刊された『あむばるわりあ』③二つの詩集に収録された詩「太陽」。全集第一巻から、それぞれを引用しよう。

太陽

カルモチインの田舎は大理石の産地で
其処で私は夏をすごしたことがあつた。
ヒバリもゐないし、蛇も出ない。
ただ青いスモゝの藪から太陽が出て
またスモゝの藪へ沈む。
少年は小川でドルフィンを捉へて笑つた。

太陽

あの大理石の産地
カルモチンの里に
夏を過した
ひばりもゐないし蛇も出ない
ただいびつの毒李の藪から

太陽がのぼり曲つて
また李の藪に沈んで行く
時々少年は小川の流れて
ドルフィンを捉へて笑つた

最初の「太陽」には「私は」と主語があり、「すごしたことがあつた。」と回想的なはじまりとなつてゐる。遠い過去を思い起こすような、奥行きがある。それが後の方では、説明的な記述を廃して、より簡潔な三行に収められている。「青いスモ、」は「いびつ毒李」に変わり、ドルフィンを捉えることが、ただ一度きりの出来事ではなく「時々」あることのように書き換えられている。この改稿については、読む人によつて意見は分かれるだろう。最初の方がよいという読者と、後の方もいいのではと感じる読者といふだろう。私は最初の方が好きだ。はじめにそのかたちで読んだからかもしれない。はじめに接した際の、刷りこみがあるのかもしれない。

変更されている部分に触れたが、この二つの詩には、あ、と思う行がある。「ヒバリもゐないし、蛇も出ない。」と「ヒバリもゐないし蛇も出ない」。表記は異なるが、ここでは一つにして考えた。この行は、うっかりすれば素通りしてしまいそうなほどさりげない。起伏のない言葉に見える。

ところが、よく見れば、なんということだろう。この行は堂々と、不在を語つてゐるのだ。たとえば「ヒバリは鳴いて、蛇は横切る」だったら、どうだろう。それは出現を表わす。ヒバリや蛇がそこに、詩が切り取る世界に、存在することを表わす。この行は、そうではない。言葉が、不在をまつすぐに指差している。言葉には、そんなことができるのだ。いないものを、いない、ということによつて指し示す。

何度も読んできて、突然その箇所だけが突出して見える日がある。とくに気にならなかつた言葉が、Xにわかに迫ってくる日がある。そのつまずきを、そのとまどいを、空から落ちてくる贈り物のように受けとめる。贈り物の包みをあけると中身は、幸福なdシユンカン、驚嘆、眩惑。「ゐない」ことや「出ない」ことの感触が、脳裡を、舐めるようにめぐる。そこには出発もeキカ_ンもなく、言葉だけがあるのだ。

西脇順三郎は『超現実主義詩論』（全集第五巻に収録）でこんなふう述べる。「人間の存在の現実それ自身はつまらない。この根本的な偉大なつまらなさを感ずることが詩的動機である。詩とはこのつまらない現実を一種独特の興味（不思議な快感）をもつて意識さす一つの方法である。俗にこれを芸術といふ」。「習慣は現実に対する意識力をにぶらす。伝統のために意識力が冬眠状態に入る。故に現実がつまらなくなるのである。習慣を破ることは現実を面白くすることになる」。

限りある生。それを「根本的な偉大なつまらなさ」と呼ぶ。人間は、人間だけで存在しているわけではない。人間以外のすべての存在に、いつでも濃密に取り巻かれている。それは空想ではなく、現実だ。これに気づくことには、西脇順三郎の言葉でいえば「不思議な快感」がある。いないヒバリ。出ない蛇。不在という状態にまで目を向けるとき、④意識の冬眠は、破られる。現実はずるりと剝かれ、未知の果物の感触とにおいが目を覚ます。⑤橋を渡る電車の音がしてくる。

（「冬眠状態」蜂飼 耳）

問一 線部 a～e までのカタカナは漢字に、漢字は平仮名に直せ。また 線部 X についてはその意味として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 急に

イ ゆっくりと

ウ じっくりと

エ しみじみと

問二 () 空欄 A に入る最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 先手 せんて

イ 雪崩 なだれ

ウ 相槌 あいづち

エ 舌鼓 したづつみ

問三 線部①「華やかな人が突然、です・ます体の丁寧語に切り替える」とあるが、その理由を四十字以内で答えよ。

問四 () 空欄 B に入る適切な語句を本文から書き抜け。

問五 線部②「天気予報では雨、実際は晴れ」とあるが、ここでいう「晴れ」とはどういうことを指しているのか。二十字以内で答えよ。

問六 線部③「二つの詩集に収録された『太陽』とあるが、詩の引用の説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 二つの『太陽』の違いを指摘することで、読む人がある時突然異なる箇所気がつく幸福感を強調している。

イ 二つの『太陽』の細部が与える印象の差が、読む人によって好悪を分けるという詩の受け止め方を強調している。

ウ 二つの『太陽』の変更されていない点に気づくことで、詩人のこだわりが読む人にも伝わるということを強調している。

エ 二つの『太陽』の共通点をあげることで、ともすると見落としてしまう詩の言葉が持つ力を強調している。

問七 線部④「意識の冬眠は、破られる」とは、どういうことか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 習慣や伝統をかえりみないことで現実から離れた詩が書けるということ。

イ 習慣や伝統に囚われないことで現実が新鮮な見え方をしてくるということ。

ウ 習慣や伝統によって現実の見え方が不思議な魅力を帯びてくるということ。

オ 習慣や伝統があるために人は現実に対して新たな認識を得られるということ。

問八 線部⑤「橋を渡る電車の音がしてくる」という一文は何を表現していると思うか。八十字以上百字以内で書け。

問題は、このページで終わりである。

2026年度 郁文館高等学校 東大・国立選抜試験

受験番号

氏名

二											一													
問八					問六	問五	問四		問三		問二	問一		問八	問七	問六	問五			問四	問三		問二	問一
												X	a	(1)										a
					問七															さん				
														(2)										
													b											b
													c											c
													d											d
													e											e